

永井郁子と宮城道雄
—— 共演の実態と意義 ——

津 上 智 実

NAGAI Ikuko and MIYAGI Michio :
Reality and Significance of Their Joint Performances

TSUGAMI Motomi

要 旨

本稿はソプラノ歌手永井郁子（1893～1983）と箏曲家宮城道雄（1894～1956）が1926年以降に行った共演の実態と意義を解明する。新聞・雑誌の記事と演奏会プログラムの調査から次の4点が明らかになった。

1）最初期の共演3回（1926年10月31日、11月7日、1927年2月27日）は異例とも言うべき大きな反響を呼んだ。

2）永井の邦語歌唱運動（1925～1941）において、邦楽奏者と共演した実績を洗い出したところ、最初の半年余りは専ら宮城と吉田晴風と組んだが、その後、地方都市では各地の邦楽奏者と共演し、宮城の共演は東京に限られた。

3）邦楽奏者との共演は32道府県に及び、植民地の樺太・朝鮮・満州・台湾と上海でも行われた。会場によっては千数百名の聴衆が詰めかけて、永井が歌う宮城歌曲に聞き入り、事前に蓄音器商組合が永井のレコードコンサートを行うなど、レコード産業やラジオ放送の力も相まって、宮城歌曲の演奏と聴取を全国に広めていった。

4）永井にとって宮城との共演は、伴奏者の技量と音楽性によって演奏の質と聴衆の反応が大きく変わることを実感させた点で意義深く、互いに大きな財産となった。

キーワード：永井郁子、宮城道雄、吉田晴風、〈せきれい〉、新日本音楽

Abstract

This paper tries to describe the reality and significance of the joint performances of the soprano singer NAGAI Ikuko (1893-1983) and the *koto* musician MIYAGI Michio (1894-1956) since 1926. The following points have been made clear through my examination of the related materials including newspaper articles, both nationwide and local, music magazines, and concert programs.

First, their first three performances (October 31, 1926, November 7, 1926, and February 27, 1927) had enormous responses.

Second, while Nagai in more than the first half year sang exclusively with Miyagi and the *Shakubachi* player YOSHIDA Seifu among traditional Japanese musicians, she later tended to collaborate with local players in the concerts outside Tokyo, and with Miyagi in Tokyo only.

Third, her collaboration with traditional Japanese musicians took place not only in at least 32 prefectures in the Japanese mainland, but also in Colonial Sakhalin, Korea, Manchuria and Taiwan, and even in Shanghai. In some concerts, a crowd of over a thousand people listened to Miyagi's songs sung by Nagai, and Gramophone trade unions held preliminary record concerts highlighting Nagai. Supported by the record industry and radio broadcasting, playing of and listening to Miyagi's songs sung by Nagai spread throughout the country.

Fourth, the partnership with Miyagi was significant for Nagai in realizing that the quality of the performance and the audience's reaction greatly depended on the skills and abilities of the accompanists. Nagai and Miyagi gained great benefits from each other.

Keywords: NAGAI Ikuko, MIYAGI Michio, YOSHIDA Seifu, Wagtail, New Japanese Music

0. はじめに

ソプラノ歌手永井郁子（1893～1983）と箏曲家宮城道雄（1894～1956）が1926年以降に行った共演は、洋楽と邦楽の音楽家の協働として画期的なものであり、黎明期にあった日本語による芸術歌曲の進展に大きな影響を与えるものとなった。2人の共演は、宮城研究においては一定の位置づけを得ているものの、永井研究においてはそもそも未開拓のために欠落しているのが現状である。永井と宮城の共演は実際にはどのようなものであり、どのような展開を見せたのだろうか。その実態と意義を解明するのが本稿の目的である。

1. 宮城研究における位置づけ

吉川英史（1909～2006）は宮城道雄の最初の評伝『この人なり 宮城道雄伝』（新潮社、1962、401-408）において、1926（大正15）年11月7日（帝国劇場における「永井郁子独唱会」）と27日（報知講堂における「宮城道雄作品演奏会」）の2つを、この年の「一番問題になる重要な演奏会」と位置づけ、その理由を「宮城が、初めて洋楽の本格的歌手との提携によって、彼の歌曲に新しい魅力を与えることができたという、宮城芸術にとって画期的な新分野が開けたのが、実にこの二つの会であったからである」と論じている。吉川は、「当時、洋楽の歌手の第一線にあった永井郁子が、箏や尺八を伴奏に、邦楽出身の宮城の曲を歌うということは、非常にセンセーショナルな話題であったと見え、早速、朝日新聞は三段抜きのトップ記事として、大々的にこのニュースを取り上げた」として、東京朝日新聞（1926年10月20日）と大阪朝日新聞（同21日）の各予告記事の見出し¹⁾と後者の写真²⁾を掲げ、「永井の歌によって、宮城の歌曲は一層光をますことになり、ひいては新日本音楽の新しい展開に、大きな役割を果たすことになったことは忘れてはならない」と高く評価している。

宮城歌曲に対する永井の功績は、その後の宮城研究においても欠かさず言及されている³⁾が、従来の研究で取り扱われているのは吉川が挙げた2つの演奏会のみで⁴⁾、その後、この2人の

-
- 1) 東京朝日新聞の見出しは「又も楽界を驚かす／永井郁子さんの試み／声楽の伴奏にピアノを廃止／箏や尺八で歌ふ／成功すれば各家庭の福音」、大阪朝日新聞のそれは「声楽の伴奏に／ピアノをやめて箏や尺八／またも楽界をおどろかす／永井郁子さんの変った試み」。
 - 2) 「箏と尺八の伴奏で——唄ふ永井さん」というキャプションで、手前から永井、箏の宮城、尺八の吉田晴風の3人が座敷で演奏している姿が三段抜の写真で掲げられている。朝日新聞データベース「聞蔵Ⅱ」で検索すると、同紙での写真掲載は、これが永井は5回目、宮城と吉田は初回となる。なお、1928年11月17日付『岩手日報』第10190号7面2-6段「永井郁子女史／邦語独唱会」には「写真は新日本音楽発表会の宮城道雄氏と永井女史」とキャプションのついた写真があるが、朝日新聞社の社旗を掲げた舞台で〈コスモス〉を歌う永井の横で箏を弾いているのは明らかに宮城とは別の人物である。
 - 3) 吉川・上参郷 1979：426。小野 1987：223-225。千葉潤之介 2000：140。千葉優子 2015：131-135。
 - 4) 吉川（1962：406）は第3の共演として1926年「11月31日」の帝国ホテルにおける永井の独唱会を論じており、千葉優子（2015：132）はこれを「11月30日」に修正しているが、永井側の資料を見る限り、この秋の帝国ホテルでの演奏は10月31日の一回のみであり、この点については修正が必要であると思われる。

共演にどのような実態があったのかは未解明のままとなっている。

そこで、本稿ではまず1926年10月末から翌年2月にかけての最初期の共演を取り上げた上で、永井が邦楽奏者と共演した演奏機会を概観し、1925年から1941年に及ぶ永井郁子の邦語歌唱運動において、宮城との共演および宮城作品の演奏がどのような広がりを持ち、どのような意味を持ったのかを考察する。

2. 最初の共演（1926年10月31日と11月7日）

1926年秋の初共演については、関係者の発言が多数残っている。

まず、帝国劇場での演奏会（11月7日）に先立って、10月31日に帝国ホテルで試演会が開かれた。10月27日付『朝日新聞』（記事50⁵⁾）に「永井郁子独唱試演会」という見出しで「三十一日午後三時帝国ホテルに楽界関係者を招き試演会を催す」と予告記事が出て、これに参加した音楽評論家の野村胡堂（1882～1963）が「あらえびす」のペンネームで11月2日付『報知新聞』に「日本人には日本の歌を、宮城氏と永井氏に敬意」と題する評を書いている。そこでは、「邦訳歌詞の永井郁子さんが、七日帝劇で歌ふものの内、宮城道雄氏作曲のもの三つを、帝国ホテルで音楽批評家、新聞記者、その他の関係者に歌つて聴かせました」と前置きして、「兎に角宮城氏の歌が、これほど立派なものであつたといふ事を、永井さんの解釈と技巧で、よりはつきり覚ることの出来たのは、私共ばかりでなく、日本楽壇のために、この上もない仕合せなことです」と称揚し、「コスモスやセキレイ⁶⁾に表はれた、さびしさと美しさ、なつかしさの余り、私は宮城氏と永井氏に敬意を表します」と締め括っている。11月2～4日付『萬朝報』には石井迷花（不詳）の評が連載され、「之は可なり大胆な試みで、昨冬永井女史が音楽界に捲起した邦訳歌詞の問題より一層意義もあり、影響も大きな問題である」と位置づけた上で、「宮城氏が箏の特性を最も巧みに応用して原詩の心持を同情的理解を以て強調するところは、古の如何なる名検校もこれ以上には出でまいと思はれた。吉田氏の尺八助奏も効果的であった」と宮城と尺八の吉田晴風（1891～1950）を讃える一方、永井に対しては「相変らず日本の女流声楽家としては稀に見る声量の豊穡、而も洗練された点で有数の最高音声楽家」としながらも、「あした日本楽器に依つて日本趣味の新音楽を開拓しようとするには、唱ひ方に就てもつと根底的の研究を必要とする様に思はれる」と課題を指摘している。

11月7日の帝国劇場における「永井郁子独唱会⁷⁾」については、複数の新聞に評が出た。11月10日付『東京朝日新聞』で牛山充（1884～1963）は、ヴォルフ歌曲の歌唱について「堀内氏の訳のすぐれてゐるのと発音の明瞭、表現の苦心とが相まつて殆ど完全に近い成功を収めた」とした上で、宮城歌曲の演奏について「新しい日本の芸術歌謡曲の創始者としての宮城氏の天分を疑ふ者はないであらう。いづれもよい中で『せきれい』の与へた感銘は空前のものであつた。画期的に出来事として残るであらう」と称賛した。11月11日付『国民新聞』で増澤健美

5) 津上（2018）に掲げた朝日新聞「記事一覧」の記事番号。以下同様。

6) 〈コスモス〉と〈せきれい〉は宮城道雄作曲の新様式による歌曲（共に1921年作曲）。

7) プログラムは3部構成で、第1部がヴォルフ歌曲8曲、第2部が宮城歌曲3曲〈コスモス〉〈母の唄〉〈せきれい〉、第3部がシューベルト歌曲3曲、小松耕輔、ヒルダッハ、パッサハ＝グノー各1曲であった。

(1900～1981)は、「宮城といふ人は独創的天才のある人で従来の邦楽から確かに一步を踏み出してゐる。『せきれい』の如きは立派な曲である。女史の歌ひ方もよかつたし、確かに成功と言ひ得る」と書き、11月18日付『東京日日新聞』では野村光一(1895～1988)が「彼女の日本語の発音が昨年の第一回の時よりも、余程上手になつて明瞭になつてゐた」と永井の日本語歌唱の向上を指摘した上で、「宮城道雄氏の三つの作曲は、とりどりに面白かつた。これらの歌曲のうちに、宮城氏は在来の邦楽の手法に、洋楽の手法をまぢへた新手法をもつて驚くべき創意を見せてゐた」と記している。

永井自身、1927年1月26日付『東京日日新聞』で、この共演の波紋の大きさを次のように述べている。

昨年末帝劇での邦語独唱会で純邦楽出身の宮城道雄氏の作品を、同氏及び吉田晴風氏の箏、尺八の伴奏で歌ひましたが、これは非常な好評で、その結果「箏尺八で歌つたのは私が先だ」などと、元祖争ひのやうなことをいひ出した仁があつたほどそれ程センセーションを起こしましたことは、前陳の言を裏書するものと考へるのでございます。

1927年5月12日付『読売新聞』はラジオ放送欄(読売62⁸⁾)で、「帝劇の独唱会は近年稀れな盛況で、さしもの帝劇も大入満員で、郁子さんの美しい声に魅せられた聴衆は何度も何度もアンコールを要求し、後半は殆ど全部二度づつ繰り返させられ四十二分間もステージに立ち続けたといふ素晴らしい人気」と紹介し、「更に第三部[ママ]の宮城道雄氏作曲の『せきれい』などは宮城氏の箏、吉田晴風氏の尺八で演唱したので、聴衆はスツカリ酔はされて了つてアンコール又アンコールでもの凄い迄の人気であつた」と伝えている。

牛山充も1930年4月14日付『秋田魁新報』の「永井さんの美声」で、「あの人の歌謡曲をあれだけ有名にしたのは全く以つて永井さんの力量です、われわれが初めて(大正十五年の十月[ママ])〈せきれい〉や〈コスモス〉を帝劇で聴かされた時は七度ものアンコールがあつたほどで素晴らしい人気でした」と述懐している。

以上から、永井と宮城の初共演は異例とも言うべき大きな反響を呼んだことが知られる。

3. 大阪朝日会館での共演(1927年2月27日)

翌1927年2月27日の大阪朝日会館における共演⁹⁾は、『週刊朝日』の創刊5周年記念大会の一環として行われたもので、『週刊朝日』の前後4号に予告や報告記事が見出される。

まず2月13日号(11巻8号)8頁に「週刊朝日五周年記念二大計画内容」の全面広告が出て、永井郁子の邦語独唱会があることが告知された。

2月20日号(11巻9号)7頁の「週刊朝日五周年記念三大会」では、第二部の「婦人の会(講

8) 津上(2019b)に掲げた読売新聞「記事一覧」の記事番号。以下同様。

9) 本来は1926年12月19日に帝国劇場で朝日新聞社の同情週間第3日として第6回「永井郁子独唱会」が予定されていたが、「天皇陛下御不例ニヨリ中止」となった。宮城歌曲4曲を含むそのプログラムが、そのまま大阪の舞台に乗せられた。

演・講談・音楽)」中に、演奏者と曲目が次のように掲載されている。

音楽 永井郁子氏邦語独唱（ピアノ伴奏：海老名道子氏、箏伴奏：宮城道雄氏、
尺八助奏：吉田晴風氏）
演唱曲目：（特別演唱）皇太后陛下御歌「以歌護世」
ヴォルフ作曲「朝の露」外数番（堀内敬三氏訳詞）
与謝野晶子氏、西條八十氏、北原白秋氏作歌三番
シューベルト作曲「子守唄」、ビルタッハ「ママ」作曲「漂浪楽人」
バッハ・グノー作曲「聖母讃頌」外数番（以上堀内敬三氏訳詞）

ここでは「与謝野晶子氏、西條八十氏、北原白秋氏作歌三番¹⁰⁾」と作歌者のみが掲載されて、宮城道雄という作曲家名が抜けており、現在の感覚からすると不思議に思われる。

2月27日号（11巻10号）「五周年記念増大号」の表紙裏面は「週刊朝日創刊の五周年記念三大会に出演する人々」と題するグラビアで、出演者の写真が紙面の上から「岡本一平」「宝塚国民座」「阪東妻三郎」「声楽の永井郁子女史」「岡田嘉子」「医学博士三田谷啓」「近松秋江」「三宅やす子」「ピアノ伴奏の海老名道子」という順で掲載されている。

3月6日号（11巻11号）には「週刊朝日創刊五周年記念三大会の印象」という報告記事があり、7頁に永井の舞台写真が3段抜で掲載されたが、そこに写っているのはピアノ伴奏で独唱する姿であり、ここでも興味の主眼は宮城ではなく永井にあったことが知られる。10頁の「聴衆を酔はした永井女史の独唱、箏尺八の伴奏」では、永井について「邦語歌唱を唱道して声楽壇に新機運を醸成した先駆者、又最近では箏尺八の和楽を伴奏とする新しい試みを案出した創造的才能に恵まれた声楽家である」と紹介し、第一部のヴォルフ歌曲の演奏について詳述したのに続いて、「盲目の天才宮城道雄氏の箏伴奏と吉田晴風氏の尺八助奏」による第二部についても一曲ずつ論じ、「疾風のごとき拍手を送つてアンコールしてもなほせきれいの姿を求めて止まなかつた」と「二千の聴衆」の熱狂ぶりを伝えている。

なお、2月27日号には永井と宮城の記名記事も掲載されたが、これについては後述する。

4. 邦楽奏者との共演

永井郁子は邦語歌唱運動を提唱して、1925年11月1日の第1回から1941年3月3日の引退公演まで1000回に及ぶ邦語独唱会を行った（津上 2018、2019b）。上記の宮城との初共演（1926年11月7日）は第5回に当たる。その後、永井は北海道から沖縄に至る日本各地に加えて、樺太・朝鮮・満州・台湾といった当時の植民地でも演奏活動を展開した（津上 2019a、2019c）。ピアニスト1名とマネジャー1名を連れての演奏旅行が基本であるが、共演の邦楽奏者が得られる土地では宮城曲を「新箏歌謡曲」としてプログラムに上げており、現存資料からは演奏曲目が不明の独唱会についても、邦楽の共演者がある場合は「新箏歌謡曲」ないし後年（1928年12月17日以降）であれば「義太夫曲」を演奏したことが確認される。そこで、これまでの調

10) 与謝野晶子は〈コスモス〉、西條八十は〈母の唄〉、北原白秋は〈せきれい〉の作詞者。

査の範囲で「邦楽奏者との共演」を洗い出してみたのが「表1：永井郁子の邦楽奏者との共演一覧」である。

なお、永井は第200回達成後の1929年7月に『邦訳歌詞問題の前後 転機 反響篇』（噴泉堂）を出版し、巻末の「永井郁子邦語独唱会年表」に第200回までの独唱会の会場、年月日（昼夜の別）と共演者を列挙している。表1で【第1回】等とあるのは、この「永井郁子邦語独唱会年表」における通し番号を示している。さらに「ラヂオ放送控」も掲載されており、その通し番号（第1～17回）も「ラヂオ【第1回】」のように記載している。

表1から明らかなように、邦楽奏者との共演は、東京（1926年10月31日、11月7、27日、12月16日）、大阪（1927年2月27日、昼夜）、京都（同年4月24日）、そして東京（同年5月10、31日）と、最初の半年余りは専ら宮城道雄と吉田晴風と組んだものであったが、その後、札幌、函館、高知、山口等の地方都市においては、それぞれの土地で活躍している邦楽奏者と共演する形が採られた。表1の演奏先を道府県別で見ると、「北海道、岩手、宮城、秋田、山形、福島、茨城、埼玉、千葉、東京、神奈川、新潟、富山、石川、長野、岐阜、愛知、滋賀、京都、大阪、和歌山、鳥根、岡山、広島、山口、愛媛、高知、福岡、長崎、熊本、大分、鹿児島」と47道府県中32に及んでおり、さらに当時植民地であった「樺太、朝鮮、満州、台湾」に加えて「上海」でも邦楽奏者と共演したことが見て取れる。

一方、その後の宮城との共演は、専ら東京（1928年1月18日の朝日講堂、同年1月22日の帝国劇場、同年4月7日の東京放送局、1929年9月24日の本所公会堂、1941年3月3日の日比谷公会堂）に限られている。最後の引退公演に関して、演奏曲目は未詳であるが、宮城の共演は複数の新聞記事と写真から確認できる。報告記事（朝日98）は「永井女史は宮城道雄氏の箏伴奏で心ゆくまで最後の独唱を行つた」と伝え、その舞台写真を掲げている。そこには永井の左で箏を弾く宮城と、右で尺八を奏する吉田晴風の姿がある。

5. 共演者たち

各地での共演者について、新聞報道から具体例を挙げると、水戸市では「島崎藤村作歌『若水』の三味線を弾く盾久雪子嬢は今年十四歳の天才的閃きを持つ少女、尺八の廣門伶風氏は本月一日国民講堂で独奏会を開き斯界の注目を惹いた吉田晴風氏の秘蔵弟子¹¹⁾」、秋田市では「尺八は過勝郡三輪村の都山流の師匠大野兎山氏〔、〕琴は横手の大庭景子嬢¹²⁾」、福島市では「箏伴奏は福島市の小林金太郎氏夫人操栄氏で新日本音楽に研究を積み仙台放送局の明星として光つて居り〔、〕門下生多数で隆盛を呈し地元より出演の箏伴奏前田中尉夫人阿井泉氏は今井慶松門下の白眉と称せられ〔、〕尺八助奏の原会山氏は都山流細田揚山門下の逸材¹³⁾」とされ、若松市では永井自身が「今回は邦訳歌詞による泰西名曲の外、御当地在住の原会山さん一党に伴助奏を願つて、宮城道雄氏の新箏歌謡曲を歌ひあげます¹⁴⁾」と述べている。高知市では「此

11) 1928年11月29日付『いばらき』第12279号5面4-6段。

12) 1930年4月9日付『秋田魁新報』第13987号2面6-7段。

13) 1930年4月26日付『福島民報』第12792号3面1-7段。

14) 同上5-6段「若松の皆々さまへ／永井郁子」。

表 1：永井郁子の邦楽奏者との共演一覧

| 時 | 会場 | 箏 | 尺八 | 三味線 | タイトル・演奏曲目 | 出典 |
|--------------|-------------|--------------|------|--------|--|-----------------------------|
| 1926-10-31 | 東京、帝国ホテル | 宮城道雄 | 吉田晴風 | | [永井郁子独唱試演会] | 朝日50 |
| 1926-11-7昼 | 東京、帝国劇場 | 宮城道雄 | 吉田晴風 | | [永井郁子邦語独唱会]【第5回】 〈コスモス〉〈母の唄〉〈せきれい〉 | 朝日51～53 読売55～59, P1 |
| 1926-11-27 | 東京、報知講堂 | 宮城道雄 | 吉田晴風 | | [宮城道雄作曲演奏会] 〈コスモス〉〈唐松は〉〈せきれい〉 | 吉川406, P2 |
| 1926-12-19昼 | 東京、帝国劇場 | 宮城道雄 | 吉田晴風 | | 【第6回】小松耕輔一曲、宮城道雄四曲、〈以歌護世〉 → [天皇陛下御不例ニヨリ中止] | 朝日54～57 |
| 1927-2-27昼 | 大阪、朝日会館 | 宮城道雄 | 吉田晴風 | | 【第7回】週刊朝日創刊五周年記念大会、〈以歌護世〉 〈コスモス〉〈母の唄〉〈せきれい〉 | 週刊朝日11-8, 10, 11 文化生活5-4 |
| 1927-2-27夜 | 大阪、中央公会堂 | 宮城道雄 | 吉田晴風 | | 【第8回】 | |
| 1927-4-24夜 | 京都、市公会堂 | 宮城道雄 | 吉田晴風 | | 【第12回】〈せきれい〉 | 京都市出14416 |
| 1927-5-10夜 | 東京、帝国劇場 | 宮城道雄 | 吉田晴風 | 吉田恭子 | 【第13回】〈せきれい〉 | 読売61～62 |
| 1927-5-31夜 | 東京、報知講堂 | 宮城道雄 | 吉田晴風 | | 【第19回】 | 報知 |
| 1927-6-24夜 | 札幌、三友館 | 高橋文子 | 藤澤鈴昭 | | 【第21回】 | |
| 1927-6-29夜 | 函館、市公会堂 | 高橋文子 | 藤澤鈴昭 | | 【第26回】 | |
| 1927-9-17昼夜 | 高知、堀詰座 | 加藤寿賀子 | 岡井岐山 | | 【第31回】〈コスモス〉〈せきれい〉 | 高知7904 |
| 1927-10-14昼夜 | 山口、山口公会堂 | 菊口緑春 | 高山麗山 | | 【第42回】 | |
| 1927-11-22夜 | 京都、市公会堂 | 萩原正吟 | 大橋鴻山 | | 【第46回】 | |
| 1927-12-3 | 大阪、ラヂオ【第6回】 | 菊田歌雄 | 星田一山 | | 菊花節記念 | |
| 1928-1-5 | 大阪、ラヂオ【第8回】 | 菊田歌雄 菊扇初野 | 小池玲斬 | | 洋楽初放送 | 東京朝日14958 |
| 1928-1-8夜 | 富山、総曲輪校 | 北村環 | 田島昇山 | | 【第50回】 | |
| 1928-1-18 | 東京、朝日講堂 | 宮城道雄 | | | 同情週間の慰労会 | 朝日60 |
| 1928-1-22昼 | 東京、帝国劇場 | 宮城道雄* | 吉田晴風 | 牧瀬喜代子* | 【第52回】 〈春の唄〉〈せきれい〉 | 朝日61 読売66, 68 |
| 1928-2-11夜 | 台北、医専講堂 | 田中春江 | 管雪山 | | 【第53回】 〈紅さうび〉〈コスモス〉〈せきれい〉 | 読売69 台湾日日8 |
| 1928-2-12夜 | 台北、医専講堂 | 田中春江 | 管雪山 | | 【第54回】 〈うわさ〉〈コスモス〉〈せきれい〉 | 台湾日日14 |
| 1928-2-14夜 | 高雄、第一小学校 | 田中春江 | 管雪山 | | 【第57回】 | |
| 1928-3-1昼 | 中津、南部小学校 | 堀織子 | 菊地当山 | | 【第70回】 | |
| 1928-3-3夜 | 大分、県公会堂 | 堀織子 | 菊地当山 | | 【第72回】 | |
| 1928-4-8 | 東京、ラヂオ【第9回】 | 宮城道雄 吉田恭子 | 吉田晴風 | | 〈以歌護世〉〈春の唄〉〈唐松は〉〈せきれい〉〈うわさ〉 | 読売70 |
| 1928-4-13昼夜 | 山口、山口座 | 菊口緑春 | 高山麗山 | | 【第75回】 | |
| 1928-4-24夜 | 釜山、府公会堂 | 関野幸雄 | 藤本柳山 | | 【第79回】 | 釜山日報1 |

| | | | | | | | |
|--------------|--------------|--------------------------------|----------------|------|--|------------------------------|-----------------------------------|
| 1928-4-27夜 | 京城、府公会堂 | 大田よし子 港毅 | 佐藤令山 古本竹陽 | | | 【第81回】 〈紅さうび〉〈コスモス〉〈せきれい〉 | 京城日報20 毎日申報3 |
| 1928-5-4夜 | 大連、満鉄協和会館 | 福永大勾当 森川とし子 | 草崎祖龍 | | | 【第84回】 | |
| 1928-5-5夜 | 旅順、昭和園 | 森川とし子 | 永田隣邦 | | | 【第85回】 | |
| 1928-5-7夜 | 奉天、奉天高女 | 名和幸代 | 名和栄次郎 | | | 【第86回】 | |
| 1928-5-12夜 | 門司、基督教青年会館 | 森田澄子 | 成藤鴻童 | | | 【第90回】 | |
| 1928-5-13夜 | 大牟田、市公会堂 | 森田澄子 | 松岡泉山 | | | 【第91回】 | |
| 1928-5-19夜 | 和歌山、市公会堂 | 菊田歌雄* 菊草富美 | 池田静山 | | | 【第94回】 | |
| 1928-5-21 | 大阪、ラヂオ【第10回】 | 菊田歌雄 田原久江 | 星田一山 | | | 十キロ記念第一日 〈以歌護世〉ほか4曲 | 大阪朝日16703 |
| 1928-6-16昼夜 | 土浦、土浦高女 | 野坂操壽 | 廣門怜風 | | | 【第96回】 | |
| 1928-7-7昼夜 | 樺太、大泊劇場 | 稲邊愛子 | D有川康透 N横山峯山 | | | 【第102回】〈コスモス〉〈せきれい〉 | 樺太日日6274 |
| 1928-7-8昼夜 | 樺太、豊原高女 | 佐雄絲豊 稲邊愛子 | 牧野逸陽 | | | 【第103回】〈せきれい〉 | 樺太日日6278 |
| 1928-7-12夜 | 札幌市公会堂 | 吉井光井 横山光喜勢橋 本質壽井 | 藤澤鈴晴 | 志村節子 | | 【第104回】 | |
| 1928-7-14夜 | 釧路、第一小学校 | 吉井光井 横山光喜勢 本質壽井 | 藤澤鈴晴 | | | 【第105回】 | 釧路7709 |
| 1928-7-19夜 | 小樽、稲穂小学校 | 吉井光井 横山光喜勢橋 本質壽井 | 藤澤鈴晴 | 志村節子 | | 【第107回】 | |
| 1928-7-20 | 札幌、ラヂオ【第13回】 | 橋本賀壽井 志村節子 横山光喜勢 吉井光井 | 藤澤鈴晴 | | | | |
| 1928-7-23 | 仙台、ラヂオ【第14回】 | 野坂操壽 | 廣門怜風 | | | 新日本音楽〈子守唄〉他4曲 | 朝日15158 |
| 1928-10-11夜 | 久喜、久喜高女 | 野坂操壽 | 廣門怜風 | | | 【第110回】 | |
| 1928-10-18夜 | 倉敷、基督教會堂 | 渡谷琴恵 | 虫明圭山 | | | 【第114回】 | |
| 1928-10-25昼夜 | 篠ノ井、篠ノ井劇場 | 太田雅弘 | 廣門怜風 | | | 【第118回】 | |
| 1928-11-11夜 | 岐阜、市公会堂 | 蒲原象雄 | 山邊鼓山 井上雁山 | | | 【第126回】 | |
| 1928-11-17夜 | 盛岡、県公会堂 | 石田星雲 | 八木甫山 櫻井文彦 | | | 【第128回】 〈母の唄〉〈せきれい〉 | 岩手日報10187, 10189, 10190, 10192 |
| 1928-12-1昼 | 水戸、県公会堂 | 高橋春香 | 廣門怜風 | 楠久雪子 | | 【第131回】 〈紅さうび〉〈せきれい〉〈うわさ〉 | いばらき12277 |
| 1928-12-1夜 | 水戸、県公会堂 | 高橋文 | 廣門怜風 | 楠久雪子 | | 【第131a回】 〈コスモス〉〈若水〉〈せきれい〉 | 同上 |

| 時 | 会場 | 箏 | 尺八 | 三味線 | タイトル・演奏曲目 | 出典 |
|-------------|-------------------|---------------|--------------|-----------------------|--|-----------------------|
| 1928-12-17夜 | 東京、朝日講堂 | 今井巖松 菊田歌雄* | | 山登千代 豊澤猿之助 杵屋佐吉 | 【第132回】 同情週間第3日 〈坂は照照〉〈朝顔の歌〉〈宵は待ち〉 | 朝日64~69 |
| 1929-1-25昼 | 鹿児島、川内高女 | 菊地夫人 | 江口蓮山 | | 【第148回】 | |
| 1929-1-26昼夜 | 鹿児島、市公会堂 | 野坂操壽 | 廣門伶風 | | 【第150回】 | |
| 1929-1-29昼 | 熊本、人吉高女 | 野坂操壽 | 廣門伶風 | | 【第152回】 | |
| 1929-2-5夜 | 長崎、南座 | 野坂操壽 | 廣門伶風 | | 【第158回】 | |
| 1929-2-26夜 | 小倉、県高女 | 野坂操壽 西川豊司 | 廣門伶風 | 豊澤団之助 | 【第171回】 | |
| 1929-4-10夜 | 東京、東京会館 | 豊澤芳太郎 | | 豊澤猿之助 | 【第174回】 | |
| 1929-4-29昼夜 | 広島、袋町小学校 | 千葉富子 | 中村晃山 岡本葉山 | | 【第184回】 | |
| 1929-5-2夜 | 高梁、高梁劇場 | 菊菜京子 | 若原孤山 | | 【第185回】 | |
| 1929-5-4昼夜 | 岡山、市公会堂 | 渡谷琴恵 | 虫明圭山 | 大月忠道 | 【第188回】 D 〈母の唄〉〈コスモス〉〈せきれい〉、 N 〈紅薔薇〉〈若水〉〈せきれい〉 | 山陽新報16625 |
| 1929-5-5昼 | 島根、今市高女 | 古川夫人 | 古川磐山 | | 【第189回】 | |
| 1929-5-7昼夜 | 島根、益田小学校 | 古川夫人 | 古川磐山 | | 【第193回】 | |
| 1929-5-12昼 | 彦根、高等商業 | 北川芳能 | 矢吹玉山 | | 【第194回】 | |
| 1929-5-16昼 | 鶴岡、鶴岡高女 | 小鍛冶三八百 | 田中斗正 | | 【第198回】 | |
| 1929-5-26夜 | 名古屋、八重小学校 | 伊藤孤花 船橋美子 | 伊藤孤花 松下秀洋 | | 【第200回】 | |
| 1929-6-8昼 | 金沢、市公会堂 | 大久保雅龍 | 藤井隆山 | | 〈コスモス〉〈うわさ〉〈母の唄〉〈せきれい〉 | 北陸日日4951 北陸毎日10587 |
| 1929-6-8夜 | 金沢、市公会堂 | 北村環 | 藤井隆山 | | 〈紅さうび〉〈うわさ〉〈母の唄〉〈せきれい〉 | 同上 |
| 1929-6-9 | 大阪、ラヂオ 【第17回】 | 菊田歌雄 | 星田一山 | 杵屋佐次郎 | 「行幸記念特別放送第九日」 〈母の唄〉〈唐松は〉〈うわさ〉 〈峠〉〈踊らうよ〉〈みかん山〉 | 大阪時事新報8840 |
| 1929-8-7 | 鎌倉、鎌倉劇場 | 野坂操壽 | | | 新箏歌謡曲四種 | 読売75 |
| 1929-9-5夕 | 大阪、美津野運動具八階 会堂 | 菊田歌雄 | 星田一山 | 杵屋富美 杵屋愛子 | 京阪神音楽関係者を招待、宮城曲3、佐吉曲3、〈巡 礼歌〉〈朝顔の歌〉 | 大阪毎日9-6(7) |
| 1929-9-14 | 東京、東京会館 | | | | 「永井郁子女史試聴会」 〈御歌歌〉〈朝顔の歌〉 杵屋佐吉 〈踊らうよ〉 〈峠〉 〈みかん山〉 | 朝日73 |
| 1929-9-21 | 東京、大隈会館 | 野坂操壽 松島禮子 | 廣門伶風 | | 新箏歌謡曲四種 | 朝日74~75 読売76 |
| 1929-9-22 | 東京、青山会館 | | | 豊澤猿之助 豊澤芳太郎 | 義大夫曲四種 | 同上 |
| 1929-9-23 | 東京、報知講堂 | | | 杵屋佐吉 杵屋佐次郎 | 長唄、新民謡四曲 | 同上 |

| | | | | | | |
|--------------|------------------|---------------|--------------|--------------------------------|--|----------------------------|
| 1929-9-24 | 東京、本所公会堂 | 宮城道雄 吉田恭子 | 吉田晴風 | | 新箏歌謡曲四種 | 同上 |
| 1929-9-25 | 横浜、横浜会館 | 野坂操壽 | 廣門伶風 | | 新箏歌謡曲四種 | 同上 |
| 1929-9-27夜 | 大阪、中央公会堂 | 菊田歌雄* 菊峯市野 | 星田一山 | 杵屋佐次郎 杵屋佐三郎 | 〈紅さうび〉〈若水〉〈せきれい〉 | P |
| 1929-9-28夜 | 大阪、中央公会堂 | 菊田歌雄* 菊峯市野 | 星田一山 | 豊澤猿糸 豊澤猿若 | 〈コスモス〉〈唐松は〉〈うわさ〉 | 同上 |
| 1929-9-29昼 | 大阪、朝日会館 | | | 杵屋登美子 杵屋あい子 豊澤猿糸 豊澤猿若 | 長唄・新民謡〈峠〉〈踊らうよ〉〈みかん山〉 義太夫曲〈巡礼唄〉〈朝顔の歌〉 | 同上 |
| 1929-9-29夜 | 大阪、朝日会館 | | | 同上 | 長唄・新民謡〈明の鐘〉〈峠〉〈踊らうよ〉〈みかん山〉 義太夫曲〈巡礼唄〉〈木遣唄〉〈朝顔の歌〉 | 同上 |
| 1929-10-6昼 | 新潟、新潟高女 | 大庭景子 | 大野侑山 | | 新箏歌謡曲四種〈以歌護世〉〈コスモス〉〈せきれい〉 〈うわさ〉 | 新潟477 |
| 1929-10-6夜 | 新潟、新潟劇場 | 大庭景子 | 大野侑山 | | 同上 | 同上 |
| 1929-11-12夜 | 岡山、市公会堂 | 渡谷琴恵 | 虫明圭山 | 豊澤猿糸 | 新箏歌謡曲三つ 義太夫曲三つ | 山陽新報16812 |
| 1929-11-14 | 松山、松山高等学校 | 加藤豊栄 | 中西窓山 | 豊澤猿糸 | 新箏歌謡曲三つ 義太夫曲三つ | 愛媛13289 |
| 1929-11-16 | 福岡、仏教青年会館 | 豊澤猿糸 | 松岡仙山 | | 〈コスモス〉〈せきれい〉〈うわさ〉 義太夫曲三つ〈巡礼歌〉〈朝顔の歌〉 | 福岡日日16560, 16561, 16564 |
| 1929-11-17昼夜 | 福岡、仏教青年会館 | 坂本加津子 | 松岡仙山 | 豊澤猿糸 | 〈紅さうび〉〈母の唄〉〈せきれい〉 | 同上 |
| 1929-11-18夜 | 熊本、市公会堂 | 坂本加津子 | 松岡仙山 藤田把山 | 豊澤廣二 豊澤猿糸 | 新箏歌謡曲三つ〈コスモス〉〈せきれい〉〈うわさ〉 義太夫曲三つ〈巡礼歌〉〈朝顔の歌〉 | 九州8437, 8442 |
| 1930-4-19 | 秋田、県記念会館 | 大庭景子 | 大野侑山 | | 〈母の唄〉〈コスモス〉〈せきれい〉〈うわさ〉 | 秋田魁新報13994、 号外 |
| 1930-4-27昼 | 郡山、市公会堂 | 野坂操壽 | 廣門伶風 | | 〈以歌護世〉〈紅さうび〉〈せきれい〉〈うわさ〉 | 福島民報12786 |
| 1930-4-27夜 | 郡山、市公会堂 | 野坂操壽 | 廣門伶風 | | 〈コスモス〉〈せきれい〉〈うわさ〉 | 同上 |
| 1930-4-28 | 若松、市公会堂 | 小林操栄 阿井泉 | 原会山 | | 〈母の唄〉〈コスモス〉〈せきれい〉〈うわさ〉 | 福島民報12792 |
| 1930-5-19 | 明正小学校 | | | | 〔上田謙氏勤続二十年記念音楽会〕〔宮城道雄、杵屋 佐吉両氏の作十曲〕〔宮城氏の五曲〕 | 朝日77 |
| 1930-6-20夜 | 苫小牧、高女講堂 | | | | 三絃歌謡五曲 | 北海タイムス14102 |
| 1930-6-28夜 | 札幌、市公会堂 | | | 杵屋佐枝 | 〈明の鐘〉〈花嫁〉〈踊らうよ〉〈みかん山〉 | 北海タイムス14113 |
| 1930-6-29夜 | 同上 | | | 同上 | 同上 | 同上 |
| 1930-7-5夜 | 真岡、第一小学校 | | | 杵屋佐枝 | 宮城〈谷間の水車〉〈春の訪れ〉 佐吉〈春の風〉〈花嫁〉〈踊らうよ〉〈峠〉〈みかん山〉 | 樺太日日6872 |
| 1930-9-20 | 東京、日比谷公園新音楽 堂 | | 廣門伶風 | 杵屋佐吉 杵屋佐次郎 | 社団法人東京市児童就学奨励会主催「音楽と舞踊と 映画の夕」 | 報知19281 |
| 1930-9-27 | 上諏訪、都座 | 渋谷雅楽代 | 岡井岐山 | | 〈コスモス〉〈せきれい〉〈うわさ〉 | 南信日日8680 |

| 時 | 会場 | 箏 | 尺八 | 三味線 | タイトル・演奏曲目 | 出典 |
|--------------------------|-------------------|------------------------------|------|----------------|---|---------------------|
| 1930-9-30 | 松本、開明座 | 太田雅麿 小木曾巻岐子 | 百瀬琴堂 | | 〈以歌護世〉〈母の唄〉〈コスモス〉〈せきれい〉〈うわさ〉〈若水〉 | 信濃民報10236 |
| 1930-10-8 | 釜山、釜山公会堂 | 日比孝子 | 福井葉山 | 杵屋作枝 鶴澤玉七 | 〈母の唄〉〈若水〉〈うわさ〉 浄瑠璃歌謡曲三種 | 釜山日報2~7 |
| 1930-10-17 | 京城公会堂 | 中西響子 | 古本 | | 〈秋の歌〉〈若水〉〈せきれい〉 〈巡礼歌〉〈木遣音頭〉〈朝顔の歌〉 | 朝鮮3~9 |
| 1930-11-29 | 台湾、医専講堂 | 瀧崎文子 | | 杵屋勝伊勢 竹本勝王 | 三味線歌謡曲〈明の鐘〉〈踊らうよ〉〈花嫁〉 | 台湾日日31, 33~37 |
| 1930-11-30 →1930-12-3 | 台湾、医専講堂 →樺山小学校 | 瀧崎文子 | | 杵屋勝伊勢 竹本勝王 | 義大夫歌謡曲〈御詠歌〉〈木遣音頭〉〈朝顔の歌〉 | 台湾日日38~41, 43 |
| 1931-1-31 | 上海、演芸館 | ? | ? | ? | 新日本音楽〈コスモス〉〈せきれい〉〈うわさ〉 | 上海日日5918 |
| 1931-2-1 | 上海、演芸館 | | | ? | 義大夫歌謡曲〈御詠歌〉〈木遣音頭〉〈朝顔の歌〉 | 同上 |
| 1931-11-20昼夜 | 鳥取、県図書館講堂 | | | | 無伴奏邦曲〈峠〉〈花嫁〉 | 因伯時報12918 |
| 1931-12-24 | 東京、京橋公会堂 | | | 豊澤芳太郎 豊澤猿之助 | 〔青森県凶作地方歌の義援金募集〕 浄瑠璃歌謡四番 | 朝日79~80 読売82, 84 |
| 1931-12-25 | 東京、青山会館 | 豊澤芳太郎 | | 豊澤猿之助 | 同上 | 同上 |
| 1931-12-26 | 東京、本所公会堂 | 豊澤芳太郎 | | 豊澤猿之助 | 同上 | 同上 |
| 1931-12-27 | 東京、日比谷公会堂 | 豊澤芳太郎 | | 豊澤猿之助 | 同上 | 同上 |
| 1932-3-1 | 東京、日比谷公会堂 | 豊澤芳太郎 | 納富壽童 | 豊澤猿之助 | 【第500回】浄瑠璃歌謡六番 | 永井1932 |
| 1933-6-10 | 茅ヶ崎小学校講堂 | 豊澤芳太郎 | 廣門吟風 | 豊澤猿之助 | 永井湘南音楽研究所開始記念音楽会 〈朝顔の歌〉〈三十歳別れの歌〉〈木遣音頭〉〈野崎村の一節〉 | 増井P1714 |
| 1933-6-13 | 東京、日比谷公会堂 | 豊澤芳太郎 | 廣門吟風 | 豊澤猿之助 | 同上 | 同上 |
| 1935-1-1 | 大阪、ラヂオ | 菊中米秋 菊広琴声 菊岡辰子 菊典照子 | | | 宮原禎次編曲〈鶴の声〉〈春の曲〉 大阪放送交響楽団、指揮：宮原禎次 | 朝日91 |
| 1936-7-19 | 大阪、ラヂオ | 菊原初子 | | 豊澤広助 | 〈朝顔日記〉 | 朝日95 |
| 1937-2-21 | 台北、市公会堂 | 野坂操壽 | 下川麗華 | | 〈コスモス〉〈初便り〉〈せきれい〉〈うわさ〉 | 台湾日日80 |
| 1941-3-3 | 日比谷公会堂 | 宮城道雄 | 吉田晴風 | | 「永井女史は宮城道雄氏の箏伴奏で心ゆくまで最後の独唱を行った」 | 朝日97, 98 読売90 |

表1の凡例：* = 箏と三絃ないし三味線の両方を担当。

出典欄の新聞名については次のように「新聞」を省略している。朝日（新聞）、京城日報、台湾日日（新聞）、釜山日報、毎日申報、読売（新聞）の各紙については津上2018, 2019a-cの記事番号を示し、それ以外の下記新聞については発行番号を付記した：秋田魁新報、いばらき、岩手日報、愛媛（新聞）、大阪時事新報、大阪毎日（新聞）、九州（新聞）、京都日出（新聞）、釧路（新聞）、高知（新聞）、山陽新報、上海日日（新聞）、高信日日（新聞）、新潟（新聞）、福岡日日（新聞）、福島民報、報知（新聞）、北陸日日（新聞）、北海タイムス（五十音順）。

『週刊朝日』『文化生活』は雑誌名。「吉川」と「永井 1932」については巻末の参考文献参照。

P1~3は演奏会プログラムが現存することを示す。

の箏は当地の師範加藤寿賀子女史、尺八は都山流准師範にして土佐女学校音楽担任の岡井隆一氏（号岐山）が夫れぞれ受持つて八月以来熱心に練習を続け今や大体の調子が合ふやうになり之からも尚練習をなして演奏当日に備へる筈」と報道され、それに続いて「此の箏、尺八の演奏が図らずとも当地に於ける斯道研究者に相当問題となつて多大の注目を払はれた事も頗る面白い¹⁵⁾」と指摘している。地元の有力な邦楽奏者との共演が、各地の奏者に宮城作品を演奏する機会を提供し、さらに話題を広げる契機となっていた様子が浮かび上がってくる。

一方で、地元の邦楽奏者との共演が満足な結果を生まなかった例も見られる。新潟での独唱会（1929年10月6日）について『新潟新聞』に「楽評／永井女史の独唱会」を書いた「雷鳥ます美」は、〈せきれい〉を宮城の演奏で聞いた経験があるらしく、それと比較して新潟での和楽器での伴奏に次のような苦言を呈している¹⁶⁾。

殊に「せきれい」の持つ喜びと感銘は作曲者宮城氏の演奏により涙ぐましい程の強い印象を受けた自分である、従つて永井女史の洗練と豊かな声量とにより歌はれることに付いては大きな期待を抱いて居つたのであるが洋楽畑に育つた女史の伴奏として和楽器は必ずしも適したものでないとの感を受けたのみである。／これは新しい試みに精進する楽壇の勇ましい先駆者に失礼な言方かも知れないが、尺八と声とが無意味に同声音を重複し琴の音律も極めて狭く力ないものであつた、故にそのポシビリティーは到底洋楽器の比ではなく一寸物足らぬ感じだつた〔、〕以前ピアノ伴奏でこの歌を永井女史から聞いたときは可成り引つけられたのであるが、今度はまるで調子が変わつたやうであつた。和楽器は矢張り行詰まつてしまうことを明かにうかがはれる。永井女史はこうした和楽器を省ずピアノの伴奏で徹頭徹尾訳歌詞運動に精進すべきではなからうか。

この中で、「以前ピアノ伴奏でこの歌を永井女史から聞いたときは可成り引つけられた」とあるのも注目される。宮城の歌曲を永井がピアノ伴奏で歌つたという報告は、1927年9月21日付『愛媛新報』にもあり、そこでは〈せきれい〉について「尺八の譜からきたのだからピアノの伴奏ぢや無理だらう」と評されている。

他の共演者として、萩原正吟（1900～1977）は京都の生田流地唄箏曲家¹⁷⁾、菊田歌雄（1879～1949）は1918年に邦楽同志会を組織して宮城の音楽運動を関西に広めた人物¹⁸⁾、野坂操壽（1905～2002）は1923年から宮城に師事した人物で¹⁹⁾、宮城と関係の深い人々である。

第132回（1928年12月17日）に客演した今井慶松（1871～1947）は東京音楽学校教授を務めた重鎮で、予告記事（朝日67）では今井慶松作曲「新曲 鶴寿千歳」を「琴伴奏今井慶松」で演奏とされていたが、報告記事（朝日69）には「今井慶松氏は琴独奏『松竹梅』（『鶴寿千歳』を変更）」とあり、予定されていた新曲の共演は実現しなかった様子である。

15) 1927年9月3日付『高知新聞』第7904号1面7-9段。

16) 1929年10月9日付『新潟新聞』第4799号5面3-5段。

17) 『昭和前期音楽家総覧：現代音楽大観』中巻 241ページ。

18) 同上、中巻 281ページ。

19) 同上、中巻 261ページ。

また、この演奏会では、永井郁子考案の義太夫曲3曲（「恋女房」の〈坂は照照〉、「朝顔日記」の〈朝顔の歌〉、「明の鐘」の〈宵は待ち〉）が菊田歌雄、豊澤猿之助（1875～1944、5代目）、杵屋佐吉（1884～1945、4代目）の伴奏で演奏されて、その練習風景が写真入りで報道（朝日66）されるなど、大きな話題となった。これ以降、豊澤や杵屋、竹本らが共演する演奏会では、義太夫曲や長唄、新民謡等が演奏曲目に挙がることとなるが、ここでは立ち入らない。

6. 聴衆

永井は自身の独唱会の聴衆について、上掲書の前書（1929年6月付）で「内地はもちろん、各種植地も限なく廻って開催された『邦語独唱会』は実に二百回余、大凡三十万の方々と述べている。これによれば平均1500人程度の来聴があったことになるが、現場はどうだったのだろうか。来場者数に触れた新聞報道から拾うと、次のようになる。

盛岡の県公会堂での独唱会（1928年11月17日）について、『岩手日報』²⁰⁾は「聴衆殊の外多く千余を算し、階上階下すし詰の大盛況」と伝える。紙面には舞台での永井の立ち姿（3段抜）と会場の聴衆（2段抜）の写真2枚が添えられ、びっしりと席を埋めている様子が見て取れる。

岡山の市公会堂での独唱会（1929年5月4日）について、『山陽新報』²¹⁾は「聴衆階上階下に溢る／真に是れ市公会堂異例の盛況」の見出しで、「定刻前一時間、既に早くも満員、さしもの大会場も、市内の各大学、中等、小学校生徒団体二千五百、一般と合せて優に四千の大聴衆に埋められて、階上階下に流れるの異例的盛況を呈した」と伝え、3段抜の会場写真を掲載している。

金沢の市公会堂での独唱会（1929年6月8日）について、『北陸日日新聞』²²⁾は「当日は午後二時半からは各女学校生徒の団体、第一高女〔校〕二百二十六名、第二高女校五十六名、女子職業校百五十名、金城女学校五十八名、薫花女学校六十五名、その他各女学校生徒五十名余の聴衆をはじめ」と団体での申込が相次いでいることを具体的に伝えている。

秋田の県記念会館での独唱会（1930年4月19日）について、『秋田魁新報』²³⁾は「婦人、令嬢、市内女学校生徒を主として中学、商業、工業、男師の生徒その他を加へ聴衆およそ千三百名、菊池知事夫人、伊賀内務部長夫人等また顔を見せた」と伝え、3段抜の会場写真に立錐の余地もない状況がくっきりと写しだされている。

上諏訪町の都座での独唱会（1930年9月27日）について、『南信日日新聞』²⁴⁾は報告記事「千余の若人は酔ふ」に3段抜の会場写真を添え、こちらもぎっしりの聴衆である。

このように各地の独唱会に非常に多くの聴衆が詰めかけて、永井が邦楽奏者の伴奏で宮城曲を歌うのを聴いたのであり、それが宮城の知名度を全国的な規模で押し上げていったのは紛れもない事実であろう。

20) 1928年11月19日付『岩手日報』第10192号3面1-5段。

21) 1929年5月5日付『山陽新報』16625号2面。

22) 1929年6月8日付『北陸日日新聞』第4951号7面。

23) 1930年4月20日付『秋田魁新報』第13998号3面1-5段。

24) 1930年9月29日付『南信日日新聞』第8684号3面1-7段。

7. 録音とレコード演奏会

永井の人気や宮城の知名度を上げた要因にレコード録音とラジオ放送がある。日本のレコード製造は1920年代半ばに大きく進展し、1925年に東京で始まったラジオ放送は、1928年には北海道から九州までの全国放送が開始されて「ラジオ時代」を迎えることになる。

こうした中、永井は1925年9月26日を皮切りに、1926年に1回、1927年に4回、1928年には10回もラジオ放送に出演し、東京と大阪に加え、名古屋、仙台、札幌、広島各局から放送を行った。第9回放送（1928年4月8日、東京）では宮城と吉田晴風・吉田恭子と共演して、宮城曲を5曲（〈以歌護世〉〈春の唄〉〈唐松は〉〈せきれい〉〈うわさ〉）演奏している。大阪放送局からの放送（第6、8、10、17回）では菊田歌雄が箏を担当して宮城曲を演奏した。

永井のレコードとしては、「ニッポノホン、ワシ印レコード」の1925年9月の新譜にシューベルトの〈小夜歌〉と〈子守歌²⁵⁾が、同10月の新譜に松島彝（1890～1985）の〈春のあした〉と〈月見草〉、〈ブラームスの子守唄〉とシューベルトの〈野ばら²⁶⁾の2枚が出された。1927年3月には宮城道雄と吉田晴風との共演で宮城曲の〈せきれい〉〈コスモス〉と〈以歌護世²⁷⁾をレコード録音している。

こうした流れの中で、独唱会の告知記事の中にはレコードとその売れ行きに言及したものも散見される。釧路での独唱会（1928年7月14日）の告知記事²⁸⁾に次の一節がある。

楽器店などでも言明してる通り所謂新日本音楽には市内にも相当の賛仰者があり宮城道雄吉田晴風作曲の「春の訪れ」「子守唄」などは尺八党の愛吹措かぬ逸品、更に「コスモス」「せきれい」のレコードが羽の飛ぶやうな売れ行を見せてゐるのも、尺八、琴三味線の微妙な旋律と肉声の階調とが融け合う其の美しいハーモニーに魅せられるため、此二曲こそ当夜の白眉であ[ら]うと信ずる。

ここで言及されている宮城道雄作曲〈春の訪れ〉も吉田晴風作曲〈子守唄〉も『ニッポノホン・ワシ印レコード総目録（昭和三年正月発売レコード迄）』に記載があり、前者は15984、後者は16550というレコード番号で販売されていた。これらが〈コスモス〉〈せきれい〉のレコードと並んで人気を博していた様子が伝わってくる。

上田での独唱会（1930年10月2日）の予告記事²⁹⁾は、「上田市内の蓄音器商組合では二十日、二十七日両日の土曜日に上田市公園演奏場内において、永井郁子レコードコンサートを開始するといふが、演奏種目は『ローレライ』『サンタルチヤ』『哀れな少女』『埴生の宿』等を始め数種目である」と伝える。蓄音器商組合が好機を逃さずにキャンペーンを張ったことが知られる。上海での独唱会（1931年1月31日、演芸館）も「上海蓄音器商組合」の主催によるもので、

25) 1925年8月23日付『東京日日新聞』第17585号3面5段。

26) 1925年9月27日付『時事新報』第15169号3面5段。

27) 貞明皇后作歌による〈以歌護世（うたをもつてよをまもる）〉。

28) 1928年7月13日付『釧路新聞』7711号2面6-8段。

29) 1930年9月20日付『北信毎日新聞』第7704号2面8-9段。

レコード業界のバックアップが大きかったことが窺われる。

8. 二人の共演が意味したもの

先述の通り、1927年2月27日号の『週刊朝日』（11巻10号）には永井と宮城の記名記事がある。まず、永井が「邦訳歌詞と新日本歌曲——週刊朝日五周年記念会出演に際して」と題する長文を寄せ、その最後に次のように綴っている。

次に、今回純邦楽者出身の宮城道雄さんの作品を、同氏及び吉田晴風さんの箏及び尺八の伴助奏にて歌ふことにつきまして、申し上げ筆を擱きたいと存じます。宮城さんは、生田流の箏の先生で、そしてわが作曲界の第一線に立たれてゐられる方です。その作品は洋風の影響をうけてゐますが、純日本式の極めて新味のある独創的のもので、器楽曲には、「水の変態」「谷間の水車」「落葉の踊り」「箏変奏曲」等、等、有名なものの外に、歌謡曲には、「せきれい」「紅さうび」「コスモス」「秋の夜」などと優れたものが沢山あります。しかるに、何ゆゑか、自発的にその作品を演唱する歌手のなかつたことを、私はかねてから怪しみに堪へなかつたのでございます。私が自ら進んで宮城さんの作品のインタープレターとして立ちましたのは、一面私達声楽にたづさはる者の新しく進むべき道を示し、多面 [ママ]、宮城さんのやうな純日本趣味を生命とする作曲をしていただけますなら西洋楽器によるよりも、むしろ日本特有の箏、尺八などの方が、却つて自然でもあり、且つ又より一層美しく演唱し得ることを御覧に示したいといふ此の二つでございます。

続いて、宮城も「永井郁子さんの芸術について」という次の一文を寄せている。

私は、可成り永い間、自分の芸術上の理想を実現するのに、有力な協力者を芸術家中に見出す事が出来ませんでしたので、寂しい時を過ごしてまいりました。それ故、一昨年夏以来の永井さんのお企てに対しましては、心から御同情を申し上げてゐた次第で御座います。

所が、思へば思はるるで、永井さんが私のものに御注目下さり、自ら進んでふつつかな曲の解釈者として立たれましたことは、私のかねて希望致してをりました最大条件にかなつたものであると存じ、有難くお受けした次第で御座います。

さて、吉田晴風君も加へて、三人して、しみじみ稽古をいたしますと、さすがに多年御苦心なすつただけあつて発音の確かさ、歌ひ廻しの巧さ、その上に表情の正しさに、ほとんど敬服致したので御座います。

私は、在来の箏曲の唄物の形式以外に、新しい芸術歌謡式のもの作曲を思ひ立ちまして、二三試作致し、その道の方に御願ひ致して試唱しました所、どうも思ふやうになりませんので歌謡曲は実は断念してをりましたので御座いますが、今回はからずも永井さんを得ました事によつて、私は急に勇気づけられ、今後は此方面にも大いに努力してみたいといふ氣になつたので御座います。

この2つの文章を読み合わせると、永井から宮城に共演を持ち掛けたこと、実際に共演してみると非常に満足できる出来であったこと、その結果、互いに敬意を抱いたことが分かる。

この共演について、永井は『文化生活』第5巻4号（1927年4月）39～46頁の「春風だより」にも寄稿して、次のように振り返っている。

私は二月二十七日に大阪朝日社の「週刊朝日」五周年の記念会と「改造」社の講演会に招かれて久しぶりで大阪へまゐりました。朝日会館でのヴォルフものは、われ乍らうまく唄ったつもりですが、聴衆の反響がもの足りないものがありました。これとは反対に宮城さんのものは割れるやうな大拍手でした。何れ劣らぬ名曲なのですが、やはり日本人の血と肉の盛られたものがぴんとくるのだと、今更のやうに痛感いたしました。／と同時に聴衆にうけるうけぬの問題は、伴奏者の「熱」の程度にもよると悟り得ました。事実、宮城さんの箏、吉田晴風さんの尺八は熱そのもので、私と三人の意気がピッタリ合つて聴者を自然に引づつて了ふのだと思ひます。／これにつけて無名人でもよいから熱のあるピアノ奏者を欲しいものだと考へさせられました。

共演者の技量と音楽性の如何によって、同じソリストでも演奏の出来が違ってくるのは当然であり、この点で宮城および吉田との共演は永井にとっても格別の達成感を覚える意義深いものであったことが言葉の端々から伝わってくる。

それだからこそ、永井と宮城の共演は語り草となった。事実、青柳有美（1873～1945）は、「琴の伴奏で、永井さんがうたつた白秋氏作歌『せきれい』は、私が全く未知であつた所の芸術の新境地を示して呉れた³⁰⁾」と語り、『上海日日新聞』は「又和曲は宮城氏の作曲『せきれい』などは其評判は大したもので故人芥川龍之助〔ママ〕を狂気讃嘆せしめた。あの有名な逸話も此曲である³¹⁾」と報じた。「帝劇における永井郁子の独唱を聴いた一女学生はその日の感激により、宮城門下となった」（吉川 1962：405）と伝えられる大島八千代は、後年、次のように回顧している（大島 1938：63）³²⁾。

永井女史の歌う宮城曲を聞いて、真心から掌が痛くなるまで拍手して、アンコールで先生〔宮城〕が手を引かれて出ていらっしやると、目に涙を浮かべて喜びました。やっと、これこそ日本人の歌と言えるものに接することができたのです。そこで、先ずこの日本人らしい歌を唄おうと決心しました。

こうして、永井と宮城の共演は一つの時代を画するものとなったのである。

30) 1930年9月17日付『南信新聞』第8857号3面4-7段。

31) 1931年1月30日付『上海日日新聞』第5918号6面1-3段。

32) 宮城道雄記念館資料室から提供して頂いた。お世話くださった千葉優子室長に感謝申し上げます。

9. おわりに

本稿では、永井郁子と宮城道雄が1926年以降に行った共演の実態と意義の解明をめざし、新聞・雑誌の記事と演奏会プログラムの調査結果から次の4点を明らかにした。

第一に、最初期の共演3回（1926年10月31日、11月7日、1927年2月27日）は異例とも言うべき大きな反響を呼んだ。第二に、永井の邦語歌唱運動において、邦楽奏者と共演した実績を洗い出したところ、最初の半年余りは専ら宮城と吉田晴風と組んだが、その後、地方都市では各地の邦楽奏者と共演する形が採られ、宮城の共演は東京に限られた。第三に、邦楽奏者との共演は少なくとも32道府県に及び、当時の植民地の樺太・朝鮮・満州・台湾とさらに上海でも行われた。会場によっては千数百名の聴衆が詰めかけて、永井が歌う宮城歌曲に聞き入り、事前に蓄音器商組合が永井のレコードコンサートを行うなど、レコード産業やラジオ放送の力も相まって、宮城歌曲の演奏と聴取を全国に広めていった。第四に、永井にとって宮城との共演は、伴奏者の技量と音楽性によって演奏の質と聴衆の反応が大きく変わることを実感させた点で意義深いものであった。

よき共演者を得ることは音楽家にとって大切な財産である。永井も宮城も互いに大きな財産を得たことを本稿の結論とする。

参考文献

- 大島八千代 1938「思ひしままに」『おとづれ』（3月号）東京：おとづれ社、62-63.
小野衛 1987『宮城道雄の音楽』東京：音楽之友社
吉川英史 1962『この人なり 宮城道雄伝』東京：新潮社
吉川英史、上参郷祐康 1979『宮城道雄作品解説全書』東京：邦楽社
倉田喜弘監修・解説、林淑姫編集・解題 2008『昭和前期音楽家総覧：現代音楽大観』（全3巻）東京：ゆまに書房
千葉潤之介 2000『「作曲家」宮城道雄』東京：音楽之友社
千葉優子 2015『箏を友として 評伝宮城道雄』東京：アルテスパブリッシング
津上智実 2018「朝日新聞データベース『聞蔵Ⅱ』に見るソプラノ歌手永井郁子（1893～1983）」『神戸女学院大学論集』65-2：83-100.
津上智実 2019a「『釜山日報』『朝鮮新聞』『毎日申報』に見るソプラノ歌手永井郁子（1893～1983）」『神戸女学院大学女性学インスティテュート『女性学評論』33：41-68.
津上智実 2019b「読売新聞データベース『ヨミダス歴史館』に見るソプラノ歌手永井郁子（1893～1983）」『神戸女学院大学論集』66-1：45-59.
津上智実 2019c「『台湾日日新報』に見るソプラノ歌手永井郁子（1893-1983）の台湾楽旅」『神戸女学院大学論集』66-2：95-111.
永井郁子 1929『邦訳歌詞問題の前後、転機、反響編』東京：噴泉堂
永井郁子 1932『いばらの道：邦語歌唱十六講』東京：噴泉堂
山川恭子編集 2006『戦前期「週刊朝日」総目録』（上中下巻）東京：ゆまに書房

（本研究はJSPS 科研費JP18K00155を受けたものです）

（原稿受理日 2020年3月16日）